

**平成 27 年度「県と市町の地域づくり連携・協働協議会」(地域会議)
1 対 1 対談 (松阪市) 会議録**

1. 対談時間

平成 27 年 12 月 12 日 (土) 17 時 00 分～18 時 00 分

2. 対談場所

松阪市産業振興センター
(松阪市本町 2176 番地)

3. 対談市町名

松阪市 (松阪市長 竹上 真人)

4. 対談項目

- 1 公約「子育て一番宣言」について
- 2 MRJ の量産化等、松阪市における航空機産業について
- 3 大学誘致について
- 4 床上浸水ゼロに向けた、三重県と松阪市の連携強化を
- 5 産官連携により共同開発した災害用備蓄品 (非常食) について

5. 会議録

(1) 開会あいさつ

知 事

皆さんこんにちは。本日は土曜日、かつまた年末で大変お忙しい中、竹上市長におかれましてはお時間を頂戴し、また多くの市民の皆さんにもお越しをいただきまして、改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

まず、竹上市長におかれましては、この 10 月に就任されまして、改めておめでとうございます。そこで 7 つの政策を掲げていただいております。今日もその多くについて触れていくわけでありますけれども、県と政策の方向性を同じくする、そういう部分が大変多くございますので、ぜひ連携して松阪市民の皆さん、三重県民の皆さんのために政策の実現で協調していきたいと思っております。

また、市長におかれましては早速に、就任して 1 週間ぐらいで、1 階の女子トイレの奥にある多目的トイレにベビーベッドを設置される等、本当にしっかりと住民ひとりひとりの目線で、改革に着手されている。大変素晴らしい姿勢であると思っておりますので、ぜひこれからもご尽力されることを、期待を申し上げます。

さて、三重県では、今日ものぼりを立てていただいておりますけれども、来

年 5 月に伊勢志摩サミットが開催されます。それで松阪市の皆さん、市民の皆さんにも大変色々応援をしていただいております、先般の松阪牛の共進会におきましては、サミット、3,310 万円のセリで肉が落とされるという、大変うれしいこともありました。実はこの 12 月 7 日・8 日に中国や韓国等の 5 か国の 9 社の海外のメディアの皆さんが、三重県にプレスツアーに来ていただいていたんですが、松阪地域と伊賀地域を回っていただいて大変好評でありました。加えて、今日、私 facebook にアップしておいたのですが、アメリカの大手旅行雑誌「Travel + Leisure (トラベル アンド レジャー)」という、すごく大きなアメリカでも大変有名な雑誌に「2016 年に行くべき観光都市ベスト 50」という世界の 50 か所の観光地が書かれており、そこでなんと日本で唯一三重県が選ばれて、そこには松阪牛もしっかりと紹介をされているというような状況であります。こういうようなことも含めて、様々なたくさんの人が行きかう、そういう松阪市であり、三重県でありたいと思いますので、よろしく願います。今日は楽しく過ごさせていただければと思いますのでよろしく願います。本日はどうもありがとうございます。

松阪市長

改めまして、皆さんこんにちは。土曜日の夕方こうやって本当にたくさんの方にお集まりいただきました。まずもって、皆様方にお礼申し上げます。本当にありがとうございます。そしてまた、鈴木知事におかれましては、本当にお忙しい中こうして松阪へお越しをいただいて、1 対 1 対談という形で実現をいただきました。ありがとうございます。本日は、松阪市のあらゆる課題に対して、市ではなかなか難しい部分、それを知事、あるいは県の方をお願いするという話が多くなると思います。例えば、この後出てくる大学誘致の話においても、大変な課題ではありますが、これがあれば本当に夢への実現の第一歩になる、そういった課題でございます。色々な面で県にお願いをさせていただかなくてはならないことも交えて、今日は和やかな雰囲気であれば様々な議論ができればと思っておりますので、皆様にも楽しんで聞いていただくような会になればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 対 談

1 公約「子育て一番宣言」について

松阪市長

それでは 1 番目の「子育て一番宣言」についてですが、先ほど知事にもご紹介いただきましたが、これが私の当時の公約集で、7 つの政策を掲げております。

この中に「子育て一番宣言」ということで、様々な子どもたちへの思い、そして人口減少というものが根底にございます。我々はやはり、いかにして若い皆さん方が「松阪ってすごいよな」「松阪に住んでみたいな」そう思っただけのようなまちづくりができるか、そこに挑戦をしたいという思いでいくつかの政策を書かせていただきました。そんな中で、やはり皆さん方が子育てをしやすいまちづくりであるとか、何かの時に「あ、松阪に住んでいてよかったな」と思ってもらえるような、そんなまちづくりをやっていきたいと思っています。

例えば、今、地方創生ということが言われています。そこでいかに独自のものを出していけるか。特に私が根底に思っていますのは、ちょっと難しい言葉ですけども、ネウボラというものです。これは、フィンランド語で「相談の場」という意味ですが、女性が妊娠して、そして出産・子育て・就学と数年間かかりますが、その間、ひとりの相談員がきちんと相談をして、そして、どんなことも相談しあえるような、そういう関係づくりを何とかできないか、国でも予算をつけていただきまして、私どもが今度整備をする健康センターの中に、子育ての拠点というような形でさせていただくことを予定させていただいています。県でも、三重県版ネウボラというような形で色々取組をされると聞いておりますけれども、本当に予算がかかります。なので、なんとかそういった試みに対して、様々な面で県も色々な形でご支援を頂けないか。こんなことを考えております。やはり、どうしてもお願いごとになりますけれども、そういった意味で県としてもこういったことを考えているよ、ということがあれば皆さんにご披露いただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

知事

ありがとうございます。まずネウボラのお話をいただきました。せっかくですから、今、竹上市長からもお話がありましたが、少し解説をさせていただきますと、フィンランドにある家族の支援の制度なんですね。今、家族と言ったんですけれども、日本の福祉制度や母子保健制度は、何か課題が起きた、あるいは養育力に課題があるお母さん、子供を支援するとか、何か課題があったところを支援するという、リスクアプローチといわれる保健制度に基本的になっていますが、フィンランドのネウボラという制度は、課題があろうがなかろうが、お父さんも含めて家族全てを、切れ目なく、特定の保健師が継続的に、そして、何か起こる前に予防的に支援をするという制度なんですね。例えば、三重県だけでなく、日本全体の母子保健では、1歳半検診ぐらいまでは赤ちゃん訪問とかがあつて、それなりに色々な人と接する機会が結構あるんですけれども、1歳半～2歳とかその次のところまでは、保育園とかに行っていない限りは、何かないと家族とかにアプローチしにくい制度になっているので、そこも埋めて

切れ目なくやっていくことが大事だと思っています。加えて、フィンランドのネウボラの場合は、子どもの発達段階にあわせて、子どもだけではなく、例えば夫婦間のDVとかが無いだろうかということも含めて、両親のケア・家族全体のケアを行うというのが、ネウボラという制度なんですね。これを三重県でも、何とか各地域の実情に応じて、松阪市なら松阪市が持っている人的あるいは地域的資源を活用して、切れ目なく、継続的に予防的に家族を支援する方法をとれないかということで、三重県版ネウボラという形でやろうという中で、今回、市長が新たに松阪版のネウボラで松阪市の地域事情にあわせてやっていこうと言っていていただいております。

そこで三重県としましては、まず今は、それをやる色々な機関、小児科や産婦人科の医師、あるいは保育士、保健師など、色々な人をつながないといけないので、そういうコーディネーターになる人材の養成を、しっかり応援をさせていただきましょう、その人がどのようにして色々な職種の人と連携したらいいのか、あるいはどういう能力を蓄えていかないといけないのか、こういうようなことを支援をしていきたいと思っています。後は、国にも地域独自の取組をやれる、比較的使い勝手のいい地域少子化対策強化交付金というものがありますけれども、三重県はさらにそれに加えて、県独自で、市町が独自にその地域の事情に合わせて実施する少子化対策を応援するための少子化対策市町創意工夫支援交付金というものも作っていますので、そういう財源なども積極的にご活用いただいて、この松阪独自のネウボラを中心とした子育てや少子化対策をやっていただければと思います。

母子保健の関係では、松阪市は、すでに今行っている研修にも積極的に参加をしていただいていますし、市独自の家族を支援する支援計画シートというのを作ったり、妊娠届出時においても、単に妊娠の届出に来て、母子手帳を交付して終わりではなくて、私を含め男性の方は、母子手帳の交付時の緊張感や、その時に接してもらったときの安心感というのはあまりわからないかもしれないですけども、そこで20分～30分丁寧に面談をしてもらうのが松阪市の特徴であったりと、非常にいい形でやっていただいていますので、ぜひ、今申し上げたような財源の活用や、ネウボラの人材育成の活用もよろしく願いできればと思います。

松阪市長

ありがとうございます。今、松阪市で0歳児訪問というのを、必ず赤ちゃんの所へ保健師が行ってということを見せていただいています。知事が言われたように、その中でどうもこれはどうかなというところについては、やはり支援をしていくということをやっています。私、根底にはこういう思いがあって、

まずはやはり児童虐待なのです。これだけはあってはいけないという中で、その原因を考えていきますと、他人に相談することができれば、相当に防げるなという気がいたします。そういった意味で、先ほどDVの話も出ましたけれども、どこかに心のよりどころであるとか、相談するような形のものであれば、相当にそういった児童虐待であるとかDVであるとか、そういったものは防いでいけると思います。また、人材育成と言われましたけれども、様々な皆さんが一生懸命力を合わせないとできない部分なので、ぜひともご支援を頂ければと思います。それと、子どもの子育ての中で様々な課題がたくさんあります。特に最近私どもが頭を悩ませているのが、保育士の不足です。これは本当に悲鳴に近い状態になっていまして、確かに市内にありました三重中京大学短期大学部には保育士の学部もありましたが、これもなくなりました。本当に需要と供給のバランスでいきますと、どこもかしこも保育士が来てほしいという状態になっていますが、なかなか来ていただけない。松阪市としても、今後真剣に取り組まなければいけないと思っているのが、すでに保育士を辞められて、もう一回帰ってきてください、この掘り起こしを真剣に考えていかないとなかなか難しい。昔、看護師でそういう時代がしばらく続きましたけれども、それに近いような形のことを考えていかななくてはいけないなど、そんなことも考えています。喫緊の課題はいっぱいありますけれども、ひとつひとつ様々な形で、県にもお願いしなければならないことがたくさんございます。まずは、これから新たに社会へ出ようという、それから進学しようという子たちが、例えば、保育の世界に行ってみたいな、そういった興味を持っていただくような仕組みというのも当然のごとくこれから要るだろうし、こういったことも多分高校の時に、自分の進路というものはある程度決まってくるものですよね。そういったときに、ひとつの選択肢としてもありますよということも、皆さん方に紹介できるようなことができればなど、様々なことをまたお願いしていきたいと思っていますので、よろしく申し上げます。

知 事

ありがとうございます。今、主に多くの課題がある中で、虐待も含めて相談が大事だということと、後、保育士の確保のことについて竹上市長からお話をいただきました。特に虐待の場合は、そういう相談ができるようにということと、なんとと言っても早期発見というのが大事だと思っています。児童虐待防止法という法律においては、周りの人が虐待かな、虐待があるかなと思ったら、それを関係機関に通報する義務が全ての国民に課されていますので、ぜひ皆さんも空振りを恐れず、児童相談窓口の市あるいは県の児童相談所など、関係機関に通報をしてください。ぜひ、皆で目を光らせていただき、何か、周りの子

どもたちやご家族で、おかしいところがあるなどと思ったら、子どもの命が失われてからでは遅いので、どうか皆さんの力をお借りしたいと思っています。そのために、やっぱり、今、市長もおっしゃっていただいたような相談体制を充実していかなければいけません。さらに、今、三重県ではこの3月末までの策定を目指して、子どもの貧困対策計画というのを作っています。子どもの貧困というのは大変問題になっています。そこでもでてくるのは、やっぱり、自分たちでアプローチできずに、家賃が滞って貧困状態であることが分かったとか、あるいは学校にあまり来なくなっただけで行って見たら虐待とDV等が全部一緒になっていたとか、そういう複合的な要因の家庭がたくさん発見されています。ですので、今市長がおっしゃっていただいたような相談を受ける体制を市町と県の児童相談所がしっかり一緒にやっていかなければいけません。県においては児童相談所の体制強化をこれからも図っていきたいと思っていますし、加えてアウトリーチと言いまして、その家に課題は無いかこちらから行くということを、虐待の多くがネグレクトと言われる育児放棄が多いわけですから、暴力でアザとかができたら分かるんですけども、そうじゃないケース等もありますので、アウトリーチの方も充実させていく、そのためには、県だけではできませんので、市と連携をしてやっていかないといけない。さっきの0歳児訪問、赤ちゃん訪問も、虐待は0歳児が一番多くなっていますから、その部分をしっかり連携してやっていくということが大事だと思っています。

それから保育士の確保。三重県で待機児童がたくさん、4月の時点で今年だと90数人確かいたと思います。三重県の場合、ほとんどが、保育所が足りなくてというのではなく、保育士が足りなくて待機児童になっているというケースなんです。保育士と子どもの数というのは、基準が決まっています。保育士一人に対して、例えば、0歳児だと3人とか、4歳児だったら何人というふうに基準が決まっていて、子どもを受け入れたくても保育所の先生がいないと受け入れられないという制度になっているので、保育所の場所はあるんだけど、保育士がいなくて確保できないということがあります。そこで、三重県としましても、竹上市長がおっしゃっていただいたのとまったく同じ問題意識を持っていまして、ひとつは、保育士になりたいけれども、経済的理由で断念してしまっている人たちに、これまで医師とか看護師ではあったんですけども、ひとりでも多くの保育士になりたいと思う人たちの希望をかなえていくようにしたいということで、保育士の就学資金制度という奨学金で、県内の保育所で勤めてくれたらその奨学金の返還を免除しますという制度を初めて作らせていただいて今年度の4月からスタートしました。また、竹上市長がおっしゃっていただいた、まさに潜在保育士と言われる保育士の資格を持っていながら結婚や出産を機に一度辞めてしまって、今は少し落ち着いてきたけれどというような方々

がいらっしゃると思います。そういう方々の復帰を支援するため、平成 25 年度から三重県保育士・保育所支援センターの中で、そういう人たちのマッチングをさせていただき、昨年度はその意向調査もやらせていただきました。「保育士さん、どうですか。どういう形態なら働けますか」そういうような意向調査等もやらせていただいて、一定の地域に何人ぐらいどういう意向の方がいらっしゃるかとかをまとめておりますので、ぜひ掘り起こしをされたいということをおっしゃっていただきましたから、松阪地域にこういう人が何人ぐらいいらっしゃいますという情報共有をして、松阪市における保育士の確保につなげていくような取組をぜひ連携をしてやっていきたいと思っています。後、先ほど市長がおっしゃっていただいた、若い時に保育士の仕事のやりがいを感じてもらえるような体験フェアみたいなものも、これから積極的に取り組んでいきたいと思っています。

2 MRJ の量産化等、松阪市における航空機産業について

松阪市長

ありがとうございます。これは今年の松阪市の十大ニュースがありますと、相当上位に入るニュースでございまして、この 11 月に MRJ の初飛行というのが成功しました。5 回延期になりやっと飛びました。そんな中で、これは非常に残念に思いますが、この松阪市に三菱重工の会社がすでにあり、そこで今までエアコンを作っていました。それが今、更地にしていまして、来年の 10 月をめどに、工場を建てて、そして 9 社が協同組合という形で産業クラスターを形成し、事業を展開していきます。クラスターというのは、ブドウの房という意味で、ひとつの産業に色々枝をつけて皆がぶら下がっているというのが大体のイメージです。9 社のいわゆる下請けの皆さん方が協同組合を組んで非常に効率よくやっていると、様々な尾翼を作るという話の中で、大体、半分ボーイング社で半分 MRJ という形でやっていくのですが、何が残念かという、その中に三重県内から 1 社も入っていない。ここが問題なんです。いずれ私どもとしては松阪市で、松阪市の製造業の皆さんがここへ参加できる、そういったところを目指していきたい。石川県が 0 からの出発で航空機産業へ県を挙げて支援をしながら、今、部品生産を受けているというような実態もございまして。様々な意味で、まず取組をさせていただきたいのは、この航空機産業に入るといっては、非常にハードルが高いんです。この前も市議会で質問をいただきましたが、自動車産業と全然違うのは、航空機産業は非常に息が長い。もう 1 機作れば多分 30 年モデルチェンジしない。ずっとその飛行機が飛び続ける。ですから、一度そこに参入すれば、変な言い方ですけども、30 年間一緒の部品を作り続ける

ことができるというそういう産業です。ただその代わり、空から物が落ちてきたら、それは大変なことになりますから、部品ひとつにすごい精度が求められる。そういう特殊な産業と言えば特殊な産業ですが、そういった中で、やはり我々の地域にある中小企業群が参入できるようなそんな取組をこれから何とか市を挙げてやっていきたい、また県にもお願いをしていかなないとなかなか市独自でどこまでできるのかということもあるわけです。それともうひとつが、雇用の話でございまして、ありがたいことにこの前も地元新聞に大きく載せていただきましたけれども、今年度で41人、来年度も合わせますと大体150人ぐらいの雇用がここで生まれることになっています。そうした中で、愛知県のとある県立高校ですけれども、航空産業コースというコースを作って、平成28年4月からいよいよ始まる。私どもは、北高と呼ばれる伝統ある松阪工業高校があるわけです。何とかここに航空学科みたいな形のものを作っただけじゃないかと。そうすることによって、航空機産業へ携われる人材を何とか作っていききたい、そういった意味も込めて、ぜひともそういう取組をご支援いただきたいと思います。

知事

はい、ありがとうございます。主に2点、ひとつは企業の参入支援、そしてもうひとつは人材育成についてお話をいただきました。MRJ (Mitsubishi Regional Jet)、これの1機あたり部品が何点ぐらいあるかご存知の方いらっしゃいますか。100万点なんです。100万点の部品があつて、その内国産の比率はたった3割しかないんです。7割は海外産をまだ使っているという状況です。三菱重工も三菱航空機も海外からだとならば調達コストもかかるわけですから、なるべく国産比率を高めていきたい、広くそういう色々な企業との関係性を構築していきたいとおっしゃっていただいています。市長がおっしゃっていただいたように、確かに航空機に参入していくのはすごく大変なんです。特に、NadcapとかJISQ9100という航空機特有の認証制度みたいなものがあつて、それをクリアした部品じゃないと、そもそもどの航空会社も入れられないというようなことがあつたりします。その認証を受けるのに何回も何回も試験を受けないといけないので、決まるまでに結構金融の支援みたいなもの、どういう資金繰りをしていくかということが非常に重要になってきますので、なかなか難しい部分があるんですけれども、三重県としては、今年の3月末に「みえ航空宇宙産業ビジョン」というビジョンを作って、これから5年間で県内の何とか30社の人たちが新たに航空機産業に参入していただくという目標を立てて取り組んでいます。そのために、今申し上げた認証を取るための取得の支援、財政的な支援やそのアドバイスであるとか、あるいは今の既存の技術を活かしてどのようにこ

の航空機産業に参入していったらいいかというアドバイスであるとか、企業の中の人材育成とか、そういうのを今やっているところであります。ぜひ、ひとつでも多くの会社が航空機に参入していけるように、例えば、自動車産業の企業が航空機産業に参入していくと、レベルアップするので、元々の自動車のところのレベルアップも図られる、航空機産業というのは、そういう効果もありますので、これから積極的に参入支援をしていきたいと思っています。後は、特に愛知県とかに三菱重工とかあるので、大きい飛行機本体の組み立てというようなものに結構目が行きますけれども、実は、その中の電線とか、トイレとか、冷蔵庫とか、電気の電球とか、色々な分野があるわけです。それらを装備品と言うんですけれども、本体だけではなくて、色々な分野が航空機にはあるということを知ってもらいたいと思いますし、現在、この東海地域には、航空機の修理とかメンテナンスをする会社がありません。組み立てることはできるんですけども、修理や定期検査をするときは、海外に持って行ってそちらで検査するということがあるので、そんなもったいないことをしないで、この東海地域に修理や点検とかをできる企業があった方がいいので、そういう企業の誘致にも取り組んでいきたいと思っていますし、そこに県内の企業がチャンスをつかんでいけるようなこともやっていきたいと思っています。

それから、松阪工業のお話をいただきました。松阪工業の、平成26年度の県内の就職者数が143人、今年度は、先ほど言っていた航空機の9社のクラスターの1社で松阪工業の子を採用していただくということも決まっております。ちなみに松阪工業は5つの学科がありまして、本当に地域の皆さんにお世話になって大活躍をしてくれています。例えば、電気科は、難関の第三種電気主任技術者試験の合格者数が5年連続で全国高校1位。自動車科は、ものづくりコンテスト自動車整備部門で6年連続全国優勝。それから機械科は、鈴鹿サーキットでソーラーカーレースという全国のソーラーカーのレースの高校生部門で昨年度は準優勝、今年度は3位。繊維デザイン科は、企業とのコラボレーションで、伊勢木綿の手ぬぐいとか、あるいは南三重活性化協議会のロゴマークを作ってくれました。後は、工業化学科も頑張ってくれています。こういうような地域の皆さんにお世話になって、5つの学科とも大変頑張ってくれているところですので、ぜひ引き続き応援をしていただきたいと思います。そこで、今の航空コース等の設置についてでありますけれども、ぜひ、検討してみたいと思いますが、これにおいては、地域の皆さんや、保護者の皆さんのご理解であるとか、今中学生の子たちやその家族の皆さんの思いというものの意識調査等もやはりしていけないといけないと思っていますので、ぜひそういう部分もご協力を賜ればと思いますし、加えて、やっぱり現実として直視しなければならぬのは、中学生の卒業生数は少子化でどんどん減っていきま

で、航空コース分の定員を純増させるというのはやっぱりなかなか難しいと思います。したがって、やっぱり皆頑張ってくれているんですけども、今の時代やこれからの時代を見据えれば、こっちのコースを少し再編してこういうコースにした方がいいかもというのがあるかもしれないので、純増をするのはなかなか難しいですけども、時代に合わせた航空機を含めた、今ある学科のコースの再編というのは十分検討しようと思いますので、そういうような形で、ぜひ、この松阪市の皆さんと連携をして、もちろん地域の皆さんのご意向というのはやっぱり大事ですから、今のような議論をしていきたいと思います。

松阪市長

ありがとうございます。確かにおっしゃるところはよくわかっていまして、愛知県の話を出しましたが、あれも自動車航空科航空産業コースという自動車をつけてあるんですよ。今、松阪工業には自動車科というのがありますので、それを3年生ぐらいで本当に自動車に行きたい子と、航空機に行きたい子と分けるとか、様々なやり方はいろいろあると思います。おっしゃるように、子どもたちが減っているという現実もありますので、そういうのを見据えながらぜひともお願いしたいと思います。

3 大学誘致について

松阪市長

ありがとうございます。これは、私の大きな公約のひとつでございます。その中で皆さん方に、当てはあるのかと聞かれます。本当に非常に難しい課題だということも十分認識しています。今もお話があったとおり、子どもたちの数が減っているという中で、今、特に三重県は、松阪地域ももちろんですけども、高校を卒業した子たちが転出しています。三重県は特に多い。ざっと数字で聞いておりますのは、全国47都道府県の中の45位、下から3番目です。要するに、自分のところの県内に留まっていない。特に松阪市より以南は、三重県の中でも高校を出て、そこに留まっているという数は少ない。もちろん何故かと言えば進学先が無いからだと思います。そういったことも考えると、やはり自分たちの町に住んで、この町で過ごしたいという子たちを受け入れる最高学府は何とか整備をしたいな、誘致をしたいなという思いがございまして。これは我々にとっては現実的に今まであった大学なんです。それがもう今から7年前に撤退を表明され、今から2年前に完全に閉校となりました。先日、現地も行きまされたけれども、すでに一部の校舎や体育館も取り壊されております。もちろん特別支援学校を作っていたかなくてはなりませんので、取り壊しをしている

ところがございます。人口は、17 万人をちょっと切りましたけれども、松阪市にとってはひとつの悲願だというふうに私は思っています。先日も県から調査した結果についても、情報提供などの様々なお支援の話もいただいています。ぜひとも積極的なご支援を頂ければと思いますので、よろしくお願いします。

知 事

はい、ありがとうございます。市長がおっしゃっていただいた全国 45 位というのは、いわゆる大学収容力と言いまして、大学に進学する人の内、何人ぐらいが県内の大学に行けるかということなんですね。三重県で言いますと 8,000 人ぐらいの子が、大体毎年県内の高校を卒業して 4 年制大学に行きます。その内の 3,000 人分の定員しか三重県内の大学にはありません。なので、8000 人の子たちがいくら行きたいといっても 3000 人分しか定員が無いと、そういうような状況が全国で 45 位であるというような状況であります。大体、そういう大学とかへ行く時に県外に流出してしまっていて、戻ってきてくれる子もたくさんいますけれども、そのままそちらで働いて暮らしていくという方がたくさんお見えになるというような状況です。この大学をはじめとした高等教育機関を活性化して、そこで人口減少に歯止めをかけるというのは、この松阪市のみならず、三重県全体の地方創生・人口減少対策として極めて重要なポイントであると思っています。

そのために何をやるかということについては、まず、ひとつは大学誘致の話はまたしますけど、その前に、まずそもそも三重県内の大学のこととかをあまり知ってもらっていないのではないかとか、本当はこういう学びたい分野があるのに知ってもらっていないのではないかとことに対して、高校生とかに対しての情報提供を今もやっていますけれどもこれからも強化していきます。特に今年高校生と保護者に対するアンケートを全県的に行った結果、子どもが進路を決める時に相談するのは、お母さんが最も多いので、お母さんにこの三重県の大学のこととかをもっとたくさん知ってもらう情報提供とか、そういうことで、まず、大学を増やさなくても、今三重県にある大学に県内の子がどんどん行ってもらえるような情報発信をしようということと、それから、知ってはいるけれどもあまり魅力は感じないという部分があるかもしれないので、今、県内に 13 の高等教育機関があるんですけども、その皆さんに自分たちの魅力を向上させるための取組をやってくださいということで、国の COC+ という補助金もありますけれども、それに加えて、三重県独自に県内高等教育機関に対して、今 6 校に対して補助金を交付して、この魅力向上のための色々な取組をやってもらっています。そこで学科の再編を検討してもらったり、例えば高田短期大学では女子サッカーのクラブチームを作ってみたりするなど、色々な魅

力向上の取組をやってもらっています。こういったこともやりつつ、加えて、やっぱり定員が少ないわけですから、定員はたくさんあった方がいいので、大学の誘致ということについて、私も積極的に取り組んでいきたいということで、これまでもやっています。

特に先ほど竹上市長がおっしゃっていただいたように松阪に大学があった時は、東紀州の地域の皆さんもよく通ってきていただいたということで、南部地域等をはじめとした広域的意味もやっぱりあると思います。そういう意味で現在調査をしています。全国中の大学に色々アプローチしたり、アンケートを取って意向調査をしたり、あるいは先行事例、他の自治体でうまくいったケースの調査とか、そういうのを詳細にやらせていただいており、もうすぐその調査がまとまりますから、調査をまとめた結果をぜひ提供させていただいて、緊密に連携をしてやっていきたいと思います。

例えば、秋田県の国際教養大学とか、大分県別府市の立命館アジア太平洋大学とかは、地元の誘致活動に非常に積極的な姿勢があったので、そういう秋田県とか、大分県の別府市とかに立地をしたというようなケースもありましたので、やっぱり地元の熱意というのは大変重要だと思いますから、そういう事実関係の調査をした後は、今、三重県の中では、大学誘致やるぞと本気で気合入っているのは、竹上市長が間違いなく一番ですので、そういう思いの竹上市長と連携しながら色々なところに熱意を伝えていって、実現をしていくように努力したいと思います。当てはあるのかということ、当ては無くてもいいんです。当てがなくてもやるんです。可能性が高いから物事をやるのではなくて、可能性が低くても必要だからやるんです。そういう思いを込めた行動をまたともにやっていければと思います。

松阪市長

ありがとうございます。そういう調査が出ましたら、もし多少なりとも可能性があるならば、全部私はその大学へお願いに行きますので、ぜひとも教えていただければと思っています。

4 床上浸水ゼロに向けた、三重県と松阪市の連携強化を

松阪市長

実はちょっと知事にはこれを見ていただこうと思います。松阪市内の方ですと、ざっと言いますとわかっていただけかなと思いますが、松阪市の西半分から東半分というふうに考えますと、松阪市は、嬉野・三雲管内と津市との境は雲出川です。そして、櫛田川のまだ向こうもございますが、大まかに祓川と

いうところが大体地理の境になってはいますが、大きな河川と申しますと、橿田川、この間に挟まれているのが松阪市です。しかもこの間に、北側から申しますと、嬉野・三雲管内については中村川、それから碧川、そして三渡川、市内を流れる百々川というのがあって、そして阪内川。阪内川というのは昭和57年に17名亡くなっており、3年間で、当時で180億円する大改修をしていた河川です。さらには、愛宕川があって、そして名古須川があります。そして、金剛川に流れていきます。浸水被害は、今年は床上浸水が14軒発生し、その前の年の大雨で23軒が床上浸水です。今からちょうど11年前に台風16号がありました。宮川で大災害があった年です。あの年に松阪市内で300軒が床上浸水しています。そこから11年が経ちました。じゃあ何が変わったのか。県も本当に努力していただいています。実を申しますと、三重県内で今、三渡川と百々川の2か所で改修事業をやっていただいております。県内29の市町がございまして、そんな中で、河川の公共事業を2か所もやっていただいているのは松阪市だけです。それほど力を入れていただいておりますが、じゃあ10年前とどれだけ変わったのかというと、ほとんど変わっていない。百々川の排水機ができて、少し実際に広がりました。ただ、それが本当に今困っているところの大塚とか塚本、そういうところが解消できているのかというと、その末端までいかない。たぶん、河川の改修事業はものすごく時間がかかると思います。そこで今日ご提案したいのは、何とか10年で効果が出るようなことを県と市で一度考えるような、そういう会議や検討会を作っていただけないか。私もやはり結局10年前と一緒の雨が降れば、たぶん一緒のように300軒浸かります。やはり市民生活で一番皆さんから要望あるのがこの点です。松阪市は道路も色々要望がありますが、一番いわゆるインフラというところで困っているのがこの河川の問題です。名古須川が実は三重県内で一番危険な川という調査結果も出ています。けれども、もうすでに2つも公共事業入れていただいた中でこれもやってくれというのなかなかできない、というのもある程度承知をしています。ならば、きちんと何か、本当に10年で成果が出るようなことを一緒になって考えていく取組をぜひともお願いしたい。今、ゲリラ豪雨ということが言われるようになってまいりました。この松阪市内に局地的な雨も降るといふ心配もございまして、そうなりますと、我々のこの地域の今のスピードで行けば、必ず一緒のことで、市民生活にとって毎年、あるいは何年かに1回床上浸水するというのは、生命財産を守るという根本のところ脅かされると思いますので、ぜひともまずは検討会を作るといふところでご協力いただきたいと思っています。

知 事

はい、ありがとうございます。まさにこの分野の専門家の竹上市長からご提案いただきました。今おっしゃっていただいた三渡川と百々川の河川改修に加えて、今、三渡川、阪内川の河川堆積土砂の撤去もやらせていただいているところですよ。

しかしながら、今おっしゃっていただいたように、市民の皆さんの床上浸水等に対する不安等が非常に大きいということが大変切実な思いとして竹上市長からお伺いすることができました。そこで、今竹上市長からご提案ありましたが、ぜひ三重県と松阪市の河川、それから下水道等の関係の部局によるこの床上浸水被害を減らすための検討会を、今年中だと1回も開催できないかもしれないので、遅くとも来月平成28年1月には立ち上げて、やっていこうと思います。そこで、そういう浸水メカニズムの調査をする、何が原因なのかという原因究明をする、そのためにどういう対策が必要なのかを皆で検討する。それは県でやることもあるだろうし、市にやっていただかなくてはいけないこともあるでしょうし、国でやってもらうこともあるかもしれない。そういう対策を皆で決めたら、役割分担に基づいて対策を講じるというようなことでこの10年を目指して、床上浸水の被害を削減するための検討会の立ち上げについて、ぜひ取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

松阪市長

100%の答えをいただきましたので、もうこの項はこれで終わりとさせていただきます。ありがとうございます。

5 産官連携により共同開発した災害用備蓄品(非常食)について

松阪市長

今日は別に企業の宣伝をするわけではございませんけれども、皆さんにもご紹介をさせていただきます。松阪市に進出をいただいておりますオクトスという会社がございます。今月12月3日にそこと松阪市が災害の産官連携事業の協定というのを結ばせていただきました。どういった話かと申しますと、このオクトスというのは親会社が永谷園です。永谷園の中に、サンフレックス永谷園という会社があります。これは福島県いわき市にあります。それで、あの3.11の時に、やはりすごく被害に遭っています。そうした中で、松阪市に自分たちの工場があるので、松阪市の皆さんに何か協力することができないだろうかというお話がございました。そうしたことから、ぜひ防災食を考えていただきたいと提案させていただきました。今は、アルファ化米というのがございます。アルファ化米の場合は、お湯で15分～20分、水ですと大体50分～1時間、食べ

られる状態になるまでかかります。本当に被災して大変だという時に、もうちょっと何とかならないのかと、一度考えてくれと言って共同開発をお願いさせていただきました。色々やり取りしながら出来上がったのがこれでございます。お湯で3分、水でも5分でご飯が本当に出来上がります。永谷園は元々フリーズドライの技術がすごくある会社なので、こういったことも可能だというので、まず今日は知事にカレー味を食べていただこうと思います。

それで、もうひとつすごいのが、このまま食べられます。一度食べてみてください。要するにあられなんです。製法が今までと全く違うので、これにお湯をかけたらご飯になる。こういうやり方で、今まで全くないようなものを作っていた。私どもも、来年から年間2万食を購入し、5年間で10万食の備蓄を考えております。なぜかと言いますと、今の最大想定で松阪市の避難者は約32,000人です。とりあえず、3食は何とか自分のところで持たそうと思うと96,000食が必要で、何とか10万食まで備蓄しておこうと考えています。賞味期限が5年間ですので、5年目を迎えて賞味期限が近づいたら、市内の小中学生に体験で食べてもらうとか、地域の皆さんに一度食べていただくとか、そういうことをやりながら回していこうかと考えております。こういったことがさらに全国に広がっていけば、松阪発で、産官連携で商品開発したものが広がっていけばと思っています。県が実施する防災訓練など、様々な機会に我々のブースを設けさせていただいて、そして「これ便利だな」と多分思っただけだと思うので、あまり宣伝というところではダメですけど、松阪発でこういった取組もさせていただきたいというふうに考えています。

<知事・市長試食>

知事

いただきます。うん、おいしい。

このあられという、永谷園の子会社だったらお茶漬けにあられが入っていますから、その技術も使って、元は本当にあられでしたけれど、出来上がったら本当にお米みたいな風味というか食感で非常に素晴らしいと思いました。おいしかったです。僕はカレーがとても好きなんですけど、それでも全然大丈夫な味でした。よかったです。

こういう取組は、本当にありがたいと思います。三重県では、毎年防災に関する県民意識調査をやらせていただいています。最近、報道でも出ましたけれども、東日本大震災が終わって、意識が薄れてしまったという人が去年は52%ぐらいだったのが、今年は56%の方が、意識が薄れてきてしまったというお答えをされています。加えて、備蓄も、東日本大震災の直後には、食料の備蓄を

ちゃんとしているという人が 25.5%だったんですけども、今年度は 24.5%に下がってしまった。備蓄自体も下がってしまっているという状況にあります。そこで、こういう手軽でおいしいというものであれば、備蓄もしやすいと思いますので、非常に有効な取組だと思えますし、こういう松阪市の取組等、色々な備蓄品の普及について、これから市町の皆さんと連携してやっていきたいと思えます。ごちそうさまでした。

松阪市長

ありがとうございます。もうひとつ、ちょっと宣伝しておきますと、しばらくは冷めても固くならないんです。そういう製法になっています様々な知恵が入った保存食なわけです。

もうひとつ、皆さんさっきから「これは何だ」とずっと思っていると思いますが、これは何かと言いますと、特許を松阪市内で取られた方がおりまして、今度この 11 月に三重大大学の駒田学長が松阪市をお訪ねいただきました。そこでもお願いをさせていただきましたが、今度、三重大大学に産官学で、さらに研究を一緒にさせていただけないかというお願いをさせていただきました。松阪発で何とかこういった新技術というのでも発信をしていきたい、これ単純に言いますと木のスピーカーなんです。この木の板がスピーカーになっています。木の板があればどこでも鳴るんです。ちなみにちょっと、さらにご紹介しますと、ちょっと外へ用意してありますが、単純に言いますと、天井が木ならば、ここへこれを当てれば音が出ます。ちょっとそこを開けてみてください。今鳴っているのは、あちらの天井から鳴っています。鳴っていますか。

知事

鳴ってます。そこから聞こえます。

松阪市長

これ、同時に様々な技術に使えます。例えば、お寺。ご住職がお経を唱えるじゃないですか。お経をマイクを通して天井へ木だけ付けたなら、お寺は木造ですから、お経が天井から流れてくる。ありがたいお経が天井から鳴る。そういう色々な使い方ができます。木さえあればどこでもスピーカーになる。様々な特許を今、取得いただきましたので、これから三重大大学と共同開発的にやっていきたいなと思っていて、松阪市にもこういった新技術というのが少しずつですけども芽生えつつございます。こういったものも、皆さんに知っていただきながら、産官学という連携の中で、様々な技術提携、そしてまた松阪市の技術を全国に広めるような、そんな取組をやっていきたいと思えますので、

県も様々な新技術についてお手伝いを頂けるとと思いますので、どうぞよろしく
お願いいたします。

(3) 閉会あいさつ

知 事

改めまして、竹上市長、今日はありがとうございました。そして傍聴に来て
いただいた市民の皆さんにも本当に最後までありがとうございました。今日は、
大変有意義な、そして市長が選挙で訴えられた 7 つの政策に基づく議論をさせ
ていただきました。いずれもしっかり前に進めていこうというようなことが多
かったと思いますので、ぜひ、これからも緊密に連携をして取り組んで参りた
いと思いますし、県会議員の皆さんもお見えですので、きっと市長と私の議論
も聞いていただいて、一緒にバックアップしてくれると思いますので、ぜひ、
皆で挙げての松阪市、三重県を盛り上げるように頑張っていきたいと思いま
すので、よろしく申し上げます。今日はどうもありがとうございました。